

周産期のエネルギー給与を 考えましよう

分娩時のトラブルを極力減らすために、周産期の適切な飼養管理が重要です。その中でもエネルギーの増給方法が成否の鍵を握ります。今回は、周産期のエネルギー給与について考えてみましょう。

一 エネルギー増給の考え方

現在研究・推奨されている周産期にエネルギーを増やす方法は二通りあります。

一つはルーメンの機能を最大化させるために乾乳期からエネルギーを増加させる方法です。二つめは、分娩後の肝機能の低下を抑えるため、乾乳期から太らせないようにエネルギーをコントロールする方法です。

どちらが正しいということはなく、現状の管理方法で問題が無いのなら特に変更するはありません。ただ、現状で周産期に課題があるのなら、検討する価値があります。

二 エネルギーの増給をはじめ るタイミング

二つの方法ではエネルギーの増給をはじめるとタイミングが異なります(表)。

表のパターン①は乾乳後期からエネルギーの増給を開始する方法です。そのことで、ルーメンの絨毛を発育させ、分娩してからのエネルギーが増加されることに備えてルーメンを慣らすしておくことができます。

パターン②は乾乳期は太らせないように、エネルギー給与は極力抑え、分娩してからエネルギーの増給を始める方法です。

どちらに共通してもいえることは増給のスピードを急にした

表 乳期毎の増給パターン

区分	乾乳前期	乾乳後期	産褥期	泌乳初期
パターン①	低	中 増給開始→	高	高
パターン②	低	低	中 増給開始→	高

※表中の低、中、高は、飼料中のエネルギー濃度の高低を示す



写真一 乾乳牛と搾乳牛の間を1ストロフル分空けて分けて管理している

させることは避けるといふことです。

◎群管理の場合

乾乳期群、泌乳期群の間に段階を踏めるような群を設けると良いでしょう。乾乳牛を二群に分けたり、産褥牛群の設置がそれにあたります。

◎繋ぎ飼いの場合

ステージ毎の個別給与が可能です。段階的にエネルギーの増給が可能です。搾乳牛の間に乾乳牛が混在する場合は、盗食を避けるため、乾乳牛は一カ所にまとめて飼うか(写真二)、盗食防止盤をつける等の工夫が必要です。

三 給与事例

A農場では、乾乳牛はラップサイレージ主体に給与しています。分娩後は産褥牛群に、搾乳用TMRにラップサイレージを併給し、両方食べられるように配慮しています(写真二)。

周産期のエネルギー濃度が段階的に高められているため、農場主からは「分娩後に食い止まる牛がほとんどいない」との感想がありました。

周産期の飼養方法は、農場によって様々ですので、今回の考え方を参考に、できるところから取り組んでみましょう。
(平成二十八年二月作成)



写真二 産褥牛に搾乳用TMRとラップサイレージを給与している